

岡山の未来

岡山市立上南中学校

一年生 飛岡 碧波

私は、夏休みになって、課題であるボランティア活動を、何にしようか悩んでいました。身のまわりのことや、イベント事のお手伝い等がありました。どれも選びませんでした。それは、自分達が普段から遊びに行っている、「九幡港」の汚れが気になっていて、そこを一番にどうにかしたいと考えたからです。

しかし、ボランティア項目にもない、前例のないようなことをするには、どう動けばいいか、誰の許可を得る必要があるのか、全くわかりませんでした。それに、そんな内容を一人でやるのは、とても不安でした。しかし、友達に言ってみると、何人も、

「一緒にやりたい。」

と言ってくれて、不安だった気持ちが吹き飛びました。

けれども、何からやればいいのか分からず、父に相談するとすぐに九幡漁協に電話してくれて、漁協の組合長さんと話してくれました。そこで壁にぶち当たりました。それは、中学生だけでは活動できないことと、漁協は月曜から金曜までしか営業していないことでした。保護者に同行してもらうのも、共働きの家ばかりなので、日程をどうするかを父が何度も組合長さんとやり取りしてくれました。ようやく土曜日にボランティア活動をして、後日に集めたゴミを集めて漁協に持って行くというアポをとってくれました。

私は、自分は大きくなったと思っていましたが、大人の力がないと、まだ勝手に行動や活動ができないということを実感しました。同時に、仕事の忙しい合間に行動してアポをとってくれた父に感謝しました。

そしてむかえた当日、六人の友達と、私の父を含めた保護者二人が集まりました。暑さ対策として、十七時に集合しましたが、やはり真夏。現地に着いてすぐに汗が吹き出しました。そのうえ、台風の直後ということもあり、港はゴミであふれていて、「これはやりがいがある。」と思いました。

拾い始めて、すぐにゴミ袋はいっぱいになりました。次の袋、次の袋と作業を進めていくうちに気付いたのは、空き缶や空きビンよりも、ペットボトルやおかしのビニール類のゴミの多さ、そして、釣り人が捨てたであろう釣り糸や釣り針の多さでした。以前、テレビで見てシヨックを受けた釣り糸のからまった海ガメ、釣り針に残ったエサを食べてしまって針がのどにひっかかってしまった鳥のことを思い出しました。プラスチックゴミで胃袋がパンパンになって死んでしまったクジラのことも思い出し、とてもこわくなりました。私たち人間が豊かな暮らしをしているなか、そのぎせいになっている生き物がたくさんいます。何の落ち度もない動物が死んでしまうような危険なものが自分の身近な場所にあんなに落ちているとは思いませんでした。周りが暗くなってきた、作業するのが困難になったので、十八時には作業を終了しましたが、この短時間でも、全員で七袋分のゴミが集まりました。私は、六人の友達と二人の大人でこの活動をして、これだけのゴミを拾うことができて達成感はありませんでした。しかし、その裏では危機感も感じていました。私達が拾ったゴミは、海を漂流しているうちに岸にたどり着いた、ほんの一部だからです。ほとんどの漂流ゴミは、今こうしてい

る間にも、動物たちに危険を与えて、苦しめているかもしれません。

今回、夏休みの課題の一環で、このゴミ拾いボランティアをしましたが、これからも継続してこの活動を続けていこうと思えました。このメンバー全員でずっとこの活動を続けていけるかはわかりません。しかし、手を止めず、行動し続けて、小さな事でもこの活動をどんどん進めていき、発信していきたいと思えます。そうすればゴミも減り、生態系への影響も少なくなるかもしれません。この私達の行動で、一人でもゴミを捨てる人が減ればと思います。それは、海の近くに生まれた私の使命だと思えます。